

# 昭和五十五年度 文藝賞発表

選考委員 江藤 淳 小島 信夫  
島尾 敏雄 野間 宏

## ◆当選作◆

「囚人のうた」(三六〇頁) 青山 健司

## ◆当選作◆

「ストレイ・シープ」(三五七頁) 中平 まみ

## ◆当選作◆

「なんとなく、クリスタル」(二五八頁) 田中 康夫

青山 健司

中平 まみ

田中 康夫



### 受賞のことば

青山 健司

受賞を知らされた後、友人とドライブ・マイティニを飲んだ。しかし、いつもの切れ味の鋭いマイティニではなかった。受賞したことは非常に嬉しいことには違いない。だが、単純に落ちる感でもないな、と思いつつ始めている。就職して三年目、ものを書きたいと思いついた。その思いが三年前ほどを原稿用紙に向わせた。書き出すように書きたいと思つた。しかしペンには思い通り紙の上を滑ろうとはしなかった。そのうち書けるさ、と思いつつ焦る毎日が

続いた。もう引き返せないと思つた。ある影が頭の中に浮かび始めたのは二年程前だった。それが少しずつ形をなし、今回のものとなった。完結した作品という意味ではばくちの第二作目に当る。受賞の目標はなかったが、この作品で認められなかったら小説を諦めるしかないかな、とも思っていた。それだけに嬉しい気持ちには変りはない。最後になりましたが、選考委員の先生方、編集部の皆さん、そしてほくを励まし続けてきた友人に、心から感謝します。

〔略歴〕本名、青木俊雄。昭和二十年生れ。愛媛県松山市出身。昭和四十五年、九州大学文学部国文学科卒業。同年日京造船に入社。現在、有明工場勤務。



### 受賞のことば

中平 まみ

夕食が済んで寝巻とガウン姿のまま、平ヤットNCを眺めている時だった。画面は山口百恵の引退騒ぎか何かを映し出していたような気がする。電話が鳴った。母から「河出書房の人からよ」と言われた時瞬間的に「よし」と思ったが「あーわさどつたらなそりな顔をして機を向きながら受話器を受け取った。駄目の電話かも知れないと思つたのだ。自衛本能、期待をもつて臨みどつとがっかり

するのはいやだったので(おさえておさえて)何かよくないことを聞いても大丈夫という熊勢を察するみたいに低目の函を出した。「当選しました」だか「入選しました」だか忘れてしまつたけれどとにかく「文藝賞に選ばれた」という言葉が耳の中に入つてきた時一オクターブ高い声で「ほんとですか、嬉しい、おもしろい、花が咲き乱れたような声でひときり輝いた。「ア、ア」と言つたんですつて」「あとで編集部の人に言われた。

昔見た映画「十戒」の中の番館のように海が真二つに大きく割れたような気分だった。

〔略歴〕本名、中平真実。昭和二十八年生れ。東京都出身。武蔵野大学文学部アノ科中退。



### 受賞のことば

田中 康夫

入選するとは思つてもみませんでしたから、書店に『文藝』が並んでいても、中間選考の様子を見ることもありませんでした。お電話を頂いた時、「河出書房新社ですが……」と聞いて、瞬間的に思つたことは、「河出には、就職の会社訪問してないのに、おかしいな……」ということ。「本日、『文藝賞』の選考会が……」との部分では、含羞した人にも激励の電話をくれるなんて、心暖かい出版社だな、という気持ち。

「おめでとうございます」といわれて「あ、そうですか」と答えてしまいました。なんとなく、クリスタルで醒めた感じでした。初めて小説を書いて、新人賞を頂いたことを嬉しく思います。「文藝賞」に応募したのは、ほんの偶然です。でも、「本誌に文學を愛する編集者の方々」を知り、こうした方が作る雑誌の新人賞であったことを、静かに神に感謝したいと思つています。これからも、頑張らば、淡々と頑張りたいと思つています。

〔略歴〕昭和三十一年四月十二日生れ。東京都出身。一橋大学経済学部四年在学中。

## ◆第二次予選通過作品(◎中は候補作)

- ワンダー・ランド 長坂一能(宮崎県)
- 島市 立花種久(東京都)
- 囚人のうた 青山健司(熊本県)
- 日記 田中二郎 村尾国士(横浜県)
- ストレイ・シープ 中平まみ(東京都)
- カッサンドラ讃歌 古川正樹(東京都)
- なんとなく、クリスタル 田中康夫(東京都)
- 鏡のフーガ 鈴木和成(徳島県)
- 驛木の岸辺 東 郁夫(東京都)
- 流れくる日々 安芸力生(東京都)
- 大嘗生活のすすめ 高延博史(東京都)
- 孤老の夢 西本 宏(東京都)
- 林田菊造・エンゼル競争 権田川てん(東京都)
- 孤島夢 熊谷 皓(東京都)

## ◆選考経過

文藝編集部 応募総数七百十八篇のうちから、先ず一次選考を行ない、既報のように五十七篇を選出し、ついで二次予選通過作品として前記の十四篇を選出した。さらに慎重審議の結果、候補作四篇を選び、十月十五日(金)選考委員出席のもとに選考委員会を開き、全作品について逐次各委員が約一時間半熱心な討議を行なった結果、全委員一致で「囚人のうた」「なんとなく、クリスタル」「ストレイ・シープ」を当選作とし、同時掲載することに決定した。

## ◆選後評

### 二種類の作品

小島 信夫

読むように送られてきた四作品は、自然と分類できた。長い枚数の「囚人のうた」と「流れくる日々」は三十代の人たちであつて、十何年前の政治運動をやつていたり、ノンポリであつたりした人々がそれからの日々をどう送り、どういう心境になっているか、というふうなものである。

時間と共に移り変わる世の中が、自然と答えを出し意味づけをしてくれる。「流れくる日々」は男の作者だが、女の立場でそれを書いている。意外となつたので実物がなくて読者は読むことができなくて残念だが、政治運動とかんけいして挫折した、戦前と六〇年代のそれと十何年前のそれとの三つの時代を代表する人物を出してきて、それを作品化するには選び方がムスカシイので、よく工夫していた。女主人公の立場にしてあるということもなかなかよくいつている。出はじめのところが男みたいになっているところなどマイナス点をつけられる材料の一つだったが、私としてみると、そういうことはまあどうで

もいことに思える。

この小説はほかの作品に劣るとは思わないが、一つだけ落ちるのは、作者は運命と向きあう、この運命を過剰に用いるべきだ。きつとこの作品もこの作者も勝つめを見るだろう。

「囚人のうた」は、評判がよくてホッとしたり、終りの方で鬱気がよくなって、主人公が浮きあがるというところが、面白いという評価だった。これがなければこの作品の意味はほとんどないことになるという意見も我々意を得たりだった。残念ながらそうだ。(このことに当たるところは「流れくる日々」にもあるように思う。かえすがえすも「流れくる日々」がいつしよに読者の前にないのが心のこりだ。別れた女の手紙がありふれていてつまらないということだった。(私は必ずしもそうは思わない)

若い二人のうちひとり、「ストレイ・シープ」は、のびのびして、むかしのあの、サガンみたいだが、もつと今ふうともいえる。もう小説を書くより仕方がない、というのがちよつと、という意見もあった。私はかならずしもそうは思わなかった。読みながら抵抗はあるが、この抵抗はここではないのではないかとも思えた。私自身はそういうことは、つつこんで考えたくない。その理由はあるが、いいたくない。

「なんとなく、クリスタル」は、男の作者が女

の立場で書いている。流行にもセックスにもごらんのように、一流をのぞみ、ゆたかさを望んでいるこの二十歳の女は、もちろん現代風俗そのものだが、むかしの石原慎太郎のことや、独歩の『武蔵野』のことを何となく考えた。註の内容は、あんまり上手ではないが、もしもつと満足させるようなものであるとしたら、違った作風の小説になっていたのであろう。

受賞作三つというのは多すぎるが、私はあえてそうしてもらいたいといった。こと私自身にかんしては、とくに読み方が上手なわけではない。とくべつ私の眼力によって選ばれるわけではない。むしろ私はそんなものはあまり持ちたくないくらいだ。私は平凡な一読者だ。だからもともと選ばれたいとして選ばれたのだ。もちろんそこまでの編集部の努力は大へんなものだが、私のいいたいのは、読者自身が自分の読み方で読んでくれることを望みたいということだ。それから二つの時代の作品が授賞してよかった。

### 三作を同時に推す

江藤 淳

昨年の秋から今年の夏まで、ほぼ一年近くフリンソンにいたあいだは、ほとんど小説と

いうものを読まなかった。

そんなわけだったので、久しぶりに四編の候補作を読み、二十代、三十代の若い作家たちに、小説を作り上げようとする意志が復活しつつあることを確認したときには、新鮮な喜びがあった。それは、過去四、五年来衰弱の一途をたどっていたものだが、実は小説の根本である。小説は、私小説といえども丹念に作られている。そのことを忘れたとき、小説の空間は薄汚れた「わたくしごと」に収縮してしまふ。今度の候補作中、只の一編もそういう薄汚れた作品がなかったところを見ると、どうやら若い作家たちは、近頃礼節をわきまははじめたらしいのである。

なかでも田中康夫氏の「なんとなく、クリスタル」は、斬新さという点では四編中右に出るものがない。気味な片仮名名前のコーラージュのなかに、「ナウい」女の子を登場させて、しかも、惚れた殿御に抱かれりや濡れる、惚れぬ男に濡れはせぬ、とでもいうべき古風な情緒で「まとめてみた」点は、まことに才気煥発、往年の石原慎太郎と庄司薫を足して二で割つた趣きがある。後世畏るべしというほかあるまい。

この小説に付けられた四個の注は、「なんとなく」と「クリスタル」とのあいだに、「」を入れたのと同じ作者の批評精神のあらわれて、小説の世界を世代的、地域的サ

ブ・カルチエアの域に墮せしめないための工夫である。とはいっても、名前という無次元の要素をいくらコーラージュしても小説空間は生れないから、作者は女主人公に二人の男を配し、必要最小限の小説空間を確保して、小気味よくこの現代都市風景を締めくくつてみせたのである。

同様の距離感では、中平まみ氏の「ストレイ・シープ」にも感じられ、注目するに足る二十代の到来を予感させる。三十代半ばの青山健司氏「囚人のうた」は、前記二作よりは地味な大作だが、女主人公のみならず副人物の女たちが活き活きと描き分けられているところなど、なかなか凡手ではないと思った。

### 選 後 感

島尾 敏雄

今年は一八編が集まったという。その中から最終予選を通過した四編を読んだ。この選り分けこそたいへんな仕事だなと思ひながら、四編共選者なものと感じた。作者がいずれも二十代半ばから三十代前半だという年齢を考えると、そのことは一團際立つてくる。或いは若年にして小説技法を斯く心得る状況が醸成されているのだろうか。殊に二

十四歳の最年少である田中康夫の「なんとなく、クリスタル」の文体の軽快な確かさのようなものとはどこから生まれてくるものか。大学生でモデル・クラブにはいつている女を主人公にして、「ブランドに弱い日本人」の中で「有名ブランド」商品ばかりを恰好よく身につけている若者の世界が、自在に展開されているのだが、離を言えば、たとえはその風俗をまざまざと目にした時に認めざるを得ない貧しさにはやや不感症であるようならず気味悪さが読後に残った。又二十六歳の中平まみの「ストレイ・シープ」には、当世若者言語で書かれた昭和初期風私小説をでも読むが如き奇妙な魅力があった。話の内容は、或るテレビ局アシスタントになった若い女性の、妻子ある男とのかわりやと死んだ父親への追憶の心情の吐露を綴つた言葉とでも言えようか。魅力と感じたのは、天衣無縫な構えのようなものの中に或いは将来性が認められたからでもあろうか。しかし話が割れていることと、如何にも文体が素朴だと思つたのだ。結局のところ私は四編のうちどの作をでも、支持が集まるようならそれを入選作としてよいという気持ちになっていたが、一応この若い二氏の作品は捨てることとして選考会に臨んだのは、以上の読後感と若い世代には理解の届きかねる部分が存したことによる。

私が支持に傾いたのは三十五歳青山健司の

「囚人のうた」である。文体は四作の中で一番地味だと言ってもよからう。博多の町で学生生活を送り、卒業して或る造船会社に入社した男のそれらのあと先の生活が綴られているが、話の軸となるのは、学生時代に同僚していた女性の自殺死の衝撃である。彼女を追憶することによって彼の過去と現在の生活が展開し、やがてそれまでの受け身の生活を転じて過去に訣別する際に立ち至つて、決定的な蹀躞が暗示されて終結する。しかしその終末の部分は私にはわからなかった。その所は別にしても、中に書きこまれた一人の若い男の生活が、時の流れをもとらえつつ手応えを感じさせるように書きこんであつた。博多弁もろましく表記されていたと思う。

安善刀生(三十一歳)の「流れくる日々」は実は私の一番気にかつた作品である。作中に描かれているにんげんの中にはかけりの深い造型の成功していた部分があつた。深淵の謎解きのような緊張も感じさせられた。しかし全体が甚だ不均衡であつた。不均衡から生ずる面白さも多少は認めた上で(全其園体験者の会話など)、なお落ち着けぬ不安定と気味悪さがあつた。しかしこの作品は私のほかには支持がなかった。結果として一挙に三作が入選になったのは二十代作者の二作品を惜しむ気持が選考員のあいだにたゆたっていたからと思う。私にも積極的にしりぞける考え

は起きなかった。

# 人生は「四人のうた」か、否か

野間 宏

優劣つけがたい四篇の作品に優劣をつけるのは、まったくむづかしく、いま、これを書きながら、迷いのなかに深く、入れられているのではないかというような気持ちにおそわれる。

四篇のうちから、選にもれた安芸刀生の「流れくる日々」は旅館を営む妻に裏切られた職中に何かかけりのある父を持ち、いまその父の生と死に心を向けて、六〇年安保世代の待所の上役に近づいて行く「わたし」から出発する。「わたし」は、かつて新左翼の運動のなかで、激越な一人のリーダーと関係をもちよくなるが、彼はすぐに「わたし」から離れ、他の女性と一緒にいる。この時、「わたし」は自分の体の欠陥に気づくのである。「わたし」と啓介の関係は、体に欠陥のあるもの二人の関係である。この男性の作家安芸刀生は女性を主人公として、中間項をよくだと、この作品をすすめている。島尾敏雄がつよくこれを推していたが、ついに冒頭ところが、男性を感じとらせるということ

で、これを選から外すことに同意し、人は他の三篇ということになった。

田中康夫の「なんとなく、クリスタル」もまた、男の作家が、女子学生を主人公にして書いた作品である。その中心にあるのはセックスである。たぐみ本で作品をすすめており、作中人物との距離のとり方も、十分である。正隆と淳一との造りが間われ、「高圧電流の走る欲び」という一つの言葉が出されるが、それが如何なるものか、まだ十分とらえられていない。文章に凝り気の無いのがよい。私は、激しい破壊するやうなものが、何処からか噴出してこないものかと、待っているが、それはついに出てこなかった。このひとの資質を認めてのことである。

中平まみの「ストレイ・シニア」は、作品がすすむにつれて、文章の下るところに、見る眼がたええられてくる。RPGTVに入社試験を受けて一年後、エム子に「行動するキャスター」大沼ゴイチから、手紙の第一弾がとどくが返事は出さない。第二弾が来る。「好きな人が出来ました」とエム子はつくり話を言ってしまう。「本間さん」エム子はその名をポイと出した。そして、孝子のある本間とエム子の間がはじまる。この二人の関係、性関係は、まことに滑稽で、読むもの笑いをひきだす。そこには驚妙で、しかも、巧みなものがある。しかしそれは用意された巧みさ

ではない。ひとりでに走りでてくる巧みさである。最後にエム子のババが家を出て行ったこと、祖母が興信所にその尾行を頼み母が祖母に誘動されていたことが明かされてくる。そして「ババの死を、エム子は自分に対する「善け」というタメ押しのように感じる」のである。しかしこの書くことの根拠の問いは十分ではない。とはいまこの父をめぐる問題は、次の作品で受けとめられるに違いない。

私が頭にもついていたのは、青山健司の「囚人のうた」である。作品は、女主人公の麻子の死後、主人公のシエンが麻子に深く入り込み、問いつめていくところからはじめられる。積極的な麻子とまったく対極にあるといつてよいシエンとの、絶えざるすれちがいは、でもいべき時間が、少し丹精に過ぎるとはいえこの作品をよく支えている。そして麻子の自殺。麻子は私生児、妾の子で、父親が明らかではなく、民族もちがうのではないかと、いう疑いを抱いているのだが、それはついに明らかにされぬ。この「囚人のうた」は、やはりうたであつて、哀歌ではないと私は判断する。また、その他の南方出身の人物も、よくとらえられている。

四人ともこれからだ。現在混乱している小説作品の構造に対する意識が、一人一人の作業の底にあるのが、強く私のうちに残されている。

明日の文学、人間、世界を考え、書き、動く

# 季刊 使用者

(編集同人) 野間 宏 井上光晴 篠田浩一郎 真継伸彦 小田 実

7 秋号

A5判 定価=780円

小学館

絶賛発売中

## 特集 文学の破壊と再生

野間 宏 「暗い絵」の根底と  
現在の文学状況

壇谷雄高 戦後文学は  
時限爆弾である

「二十六年戦後」の世界で 小田 実

恐怖力と土着の事物のちがひ

〈特別レポート〉  
なぜ弱者だけが公害を受け取るのか 和田長久

アメリカ・ニューメキシコ州のウラン公害を告発する

小説

つらつらさき 瀬戸内晴美  
(二葉をうけて)  
未完のままきた樋口二葉の後をうけて、瀬戸内晴美が、この断片を綴るまで、恐に生きた二葉の遺言は……

重なる声 塩貝鮮一郎 死体について 野間 宏  
その四

菩提薩多 真継伸彦 亡国 運載④ 佐江衆一

詩

山の神 高良留美子  
乾 期 水橋 晋  
ある春のある風景にやせて 野村 修

私にとつての 「二十世紀小説」選載④ 中村真一郎  
構造と文学 寛 次郎

「海に生くる人々」と 「上海」第3回 篠田浩一郎